

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：12401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06084

研究課題名（和文）幼児における聴取能力の育成に着目した歌唱環境の設定と支援方法の開発

研究課題名（英文）Designing environment and methods to support young children's singing to facilitate their listening skills

研究代表者

三橋 さゆり（MITSUHASHI, Sayuri）

埼玉大学・教育学部・講師

研究者番号：70758440

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児が聴取能力を發揮して歌唱活動を行うために適した歌唱環境と支援の方法を解明することを目的とした。まず4園の幼稚園の一斉歌唱を観察し、幼児が歌を習得する過程を分析した。次に保育者へインタビューを行い、歌唱活動の環境設定に関する彼らの意図を調査した。これらの結果を踏まえ、歌唱環境の要素の一つである伴奏楽器の役割を調査するための実践プログラムを計画し実施した。ピアノや他の楽器での伴奏による幼児の歌声の違いを比較し、これらの楽器を保育室に導入した時の幼児の言動を記録した。その結果、多様な楽器を保育室に導入することで幼児の音への興味が引き出され、聴く力が發揮される可能性があること示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explain the environment and methods to support children's singing using their listening skills. First, I observed children's singing activities in four kindergartens and analyzed the process of children learning songs. Second, I interviewed teachers about how and why they designed their singing environment. Based on this research, I designed a singing practice to investigate the role of different musical instruments in the accompaniment of children's singing and compared their voices with piano accompaniment and other instruments. I also described the children's verbal and physical behavior on being introduced to several musical instruments in the classroom. The result showed that children seem to be more interested in and more carefully listened to sounds.

研究分野：乳幼児音楽学

キーワード：歌唱 聴取能力 環境構成 支援方法 幼児教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 幼児期における歌唱の重要性

幼稚園や保育園における幼児の活動の中で、歌唱は生活や行事、遊戯などと密接にかかわる活動であり、実際の保育現場では、歌唱活動がしばしば見られる。幼児は歌唱活動を通して、リズム感や音感などの身体感覚を身につけることができる。また、保育者や他の幼児と一緒に歌う活動は、他者と呼吸を合わせることであり、コミュニケーション能力の発達や社会性の学習につながる。加えて、既存の歌を歌うことは文化の継承の観点からも重要である。これらのことから、幼児期の歌唱活動が重要であることは明らかである。

(2) 保育における歌唱研究の課題

これまで、幼児の歌唱に関する研究は数多く行われているが、内容は教材に関する研究が多く、子どもの歌唱行為そのものを対象にした研究は少ない(今川 2014)。したがって、どのように歌唱活動を行うと、幼児が仲間とコミュニケーションを取りながら歌うことができるのか、幼児の歌唱をどのように支援する必要があるのかというような歌唱環境や支援の方法について検討していく必要がある。

(3) 歌唱活動における「聴く」行為の重要性

歌唱は、音高やリズムを把握して歌う行為であるため、聴取の能力と密接に関わっている。演奏行為において、「聴く」ことの重要性は先行研究でもしばしば述べられてきたが(例えば、佐藤 2012 他)、歌唱活動においても、自分や他者の声、伴奏の音などが聴けるようになると、正確な音高を認識できたり、楽曲に適した音色で歌うように自分の声をコントロールしたりするようになる。加えて聴取能力が発達すると、他者の表現を感じて自分の表現を構築するようになったり、自分の役割を自覚したりするようになる。つまり、「聴く」行為は、音楽的な能力の獲得や社会性の発達と密接に関連していると考えられる。

筆者は、これまでにグラウンデッド・セオリー・アプローチ(戈木クレイグヒル 2006, 2008 他)の考え方に基づいて小学校の課外活動における合唱の場面を調査し、教師と児童が相互作用する活動において歌唱の表現が形成されていく過程と表現の学習に必要な要素を解明した(三橋 2014 他)。その結果、強弱、速度や間などの歌唱表現に関する問題を発見し、その問題を一緒に歌う仲間と共有すると、児童が表情豊かに歌唱できるようになることが分かり、そのためには「聴く」ことが非常に重要であることが分かった。加えて、歌唱の学習を成立させるような社会的環境の条件では、上級生が歌唱活動を支える体系が構築され、上級生の声を下級生が聴ける

ような環境が整えられていると、聴取能力が発揮されるようになること、楽曲を解釈して聴衆に伝えようとするようになる表現の形成過程では、周囲の音や他者の声を聴取することで、楽曲の特徴を把握して表現に関する問題を発見したり、仲間とその問題を共有したりできるようになることが明らかになった。

以上のように歌唱活動では、聴取能力が重要で、聴取能力の発達が音楽的な能力の獲得だけでなく、社会性の発達にも貢献することが示された。歌唱行為は幼少期から継続することであるため、幼児を対象とした聴取能力に対する支援方法や環境設定は必至であると考えられる。しかし、これまでの小学生を対象とした研究の知見をそのまま幼児に当てはめることは、発達の点から考えて難しい。幼児に適した支援や環境を設定するためには、幼児の発達と保育現場の実態を調査し、それに基づいた理論的な枠組みを構築する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児が聴取能力を発揮させて歌唱を行うために適した歌唱環境と歌唱支援の方法を明らかにすることである。

歌唱活動は幼児教育の中で重要な活動の一つである。なぜならば、幼児期に音楽や詩のもつリズムや旋律を体験することで、身体感覚を育むことができるからである。加えて、歌唱活動は仲間や保育者と呼吸を合わせて行うため、コミュニケーション能力の発達や社会性の芽生えにつながる。保育現場においても、歌唱活動の重要性は認識されているが、どのような環境や配置で歌唱活動を行うと音楽的な能力が身につくのかということや、他者とコミュニケーションを円滑に取りながら歌唱できるのかについては、いまだに明らかになっていない。そこで本研究では、「聴く」行為に着目し、幼児が聴覚を鋭敏化させて歌唱活動を行うために適した歌唱形態と歌唱支援の方法を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、保育現場における歌唱活動の実態調査を実施し、それらの成果を分析して幼児の歌唱に影響を及ぼす環境の要因を抽出した。また、歌唱活動の要因に関するプログラムを計画し、幼稚園の年長児を対象に実施し、幼児の歌唱や聴取能力に及ぼす影響を検討した。

(1) 保育現場における実態調査

幼稚園4園を対象に、一斉歌唱の場面と好きな遊びで歌が生起する場面を対象に参与観察を行った。また、これらの幼稚園の保育者に半構造化インタビューを実施し、歌唱活動の環境設定や支援の方法に関する保育者の意図についての聞き取りを行った。

データの収集方法

幼稚園の歌唱が生起する場面を対象とし、a) 歌唱環境、b) 歌唱活動に関する保育者の支援方法の2点を観点として観察を行った。1点目の歌唱環境とは、一斉歌唱では、どのような並び方で歌唱が行われているか、歌唱活動の際、保育者と幼児または幼児同士はどのように交流しているのかなどである。2点目の保育者の支援方法とは、幼児が歌を覚えたり、覚えた歌を歌ったりするときの支援方法で、伴奏の方法や伴奏するときの楽器の種類、範唱の有無などである。

観察では、メモを取る他に、ビデオカメラ3台とICレコーダー2台によって録画・録音を行い、データを収集した。

観察した後に、歌唱活動を担当した保育者にインタビューを行い、支援の意図や幼児の歌唱形態に対する考え方を聞き取った。

データの分析方法

観察とインタビューで得られたデータをテキスト(文字データ)にした。これらのテキストを切片化し、各切片にラベル名をつけた。その後、ラベル名や切片の内容をもとにグループ化し、グループ化したものを基に、カテゴリーを作成し、カテゴリー同士の関連を検討した。

(2) プログラムの実施と検証

(1)の保育現場における実態調査から、歌唱環境の要因の一つとして歌唱の伴奏に着目し、ピアノ、木琴、鉄琴それぞれで伴奏した時の幼児の歌声や歌唱の様子を比較することで、幼児の聴取能力が発揮されるような歌唱環境の解明を目指した。そのために、5歳児クラスの一斉歌唱において、木琴、鉄琴、ピアノの各楽器で行う伴奏を聴きながら幼児に歌唱してもらい、その違いを比較した。

加えて、木琴と鉄琴を好きな遊びの時間に保育室に設置し、興味のある幼児がそれらの楽器の伴奏で歌う活動に研究者が参与しながら観察し、幼児の音に対する反応を検討した。そのために、幼児の歌声と彼らの言動をビデオカメラ及びICレコーダーで記録し、その内容を詳細に分析して幼児の聴取能力の発揮にどのような影響を及ぼすかについて考察した。

4. 研究成果

(1) 保育現場における実態調査

保育現場における実態調査では、好きな遊びで歌唱が生起する場面と一斉歌唱で新曲を覚えていく過程を観察し、一斉歌唱で生じる保育者と幼児あるいは幼児同士の相互作用及び歌唱活動の並び方について解明した。

一斉歌唱で生じる相互作用

一斉歌唱時の保育者と幼児、あるいは幼児同士の視線の方向や身体の動きの同期に着目し、彼らが歌唱を通して共有しているもの

を探った。その結果、歌を覚える初期から保育者と幼児の動きに同期が起きていることが分かった。このことから、幼児が保育者の歌声を聴き、保育者の身体の揺らぎを見て、音楽のもつ拍感を捉え、音楽の流れを感じていたと考察した。また、歌の習熟度が増すと、歌唱の際に、幼児が他児に視線を向けたり、幼児同士で身体の動きが同期したりする場面がしばしば見られ、幼児同士で拍感を共有している姿が見られた。

これらのことから、幼児は保育者の範唱を集中して聴くことで、拍感や律動を捉え、それらを感じながら歌うことで、音楽的な表現力を身につけていくこと、同じ楽曲と一緒に歌うことで同じ拍感や律動を感じ身体の動きが同期する経験が幼児同士の一体感の芽生えとなり、彼らの関係を構築する一助になる可能性があることが示唆された。

以上のことより、歌唱活動では、保育者と幼児あるいは幼児同士が相互作用する過程で、彼らの人間関係が構築されていったり、音楽的な表現が身につけていったりしていく可能性があることが明らかになったが、その場にいる人々の相互作用が生じるには、環境の設定が重要になる。そこで次に、環境設定の一つとして歌唱活動での並び方について調査を行った。

歌唱活動の並び方

一斉歌唱の並び方としては、コの字型、半円型、円型、列型、ランダム型の並び方が見られた。保育者は、一斉歌唱の場面において、保育者と幼児あるいは幼児同士が顔や身体の動きを見合うなど、相互に交流できるように並び方を配置していた。また、幼児に初めて歌を提示する場合はランダム型、楽曲をある程度覚えてきたらコの字型、動きを伴って歌う場合は円型など、保育者が活動の並び方を決定する際には、歌唱活動の内容や幼児たちの歌の習熟度、保育者と幼児の距離、幼児同士の距離、幼児の視線の方向などを考慮していた。

(2) プログラムの実施と検証

上記のように実態調査において、保育者は、保育者と幼児や幼児同士の相互作用が生じるような環境を設定し、歌唱の援助を行っていた。特に、保育者と幼児または幼児同士が交流できるように、幼児の視線の方向を考慮して環境を設定していた。しかし、歌唱活動は音を用いて表現する活動であるため、見るのみでなく聴くことも重要な行為である。そこで、幼児の聴くことに関連する要素である歌唱の伴奏に焦点を絞ってプログラムを計画し、それを実施して保育室の歌唱環境について検討を行った。

伴奏楽器の違いによる幼児の声の比較

ピアノ、木琴、鉄琴の各楽器の伴奏を聴いて幼児が歌唱したところ、ピアノ伴奏に合わ

せて歌唱を行ったときに最も音高が安定して歌えていた。木琴や鉄琴の伴奏に比べ、ピアノ伴奏の音量の方が大きく、幼児に伴奏が聞こえやすかったことなどが原因として考えられる。

しかし、木琴や鉄琴による伴奏の方が、幼児の音量が大きい、幼児の姿勢が前傾になる、拍に沿って幼児の身体が横にゆれるなどの様子が見られるため、歌うモチベーションは増加しているように捉えられた。

子どもの音への興味と音楽表現の生起

木琴や鉄琴を保育室に設置し、それらを伴奏として歌う活動を行ったところ、幼児は木琴や鉄琴に興味を示し、積極的に歌唱を行った。この活動の過程において、幼児はマレットの違いによって生じる音の違いに対して即座に気づいて指摘するなど、音に敏感に反応していた。加えて、木琴や鉄琴と一緒に合奏しながら歌うために、自分たちで手作り楽器を作りながら様々な音を発見したり、自分たちが木琴や鉄琴を試奏する機会に、自分なりの奏法で音をならしたりしてみるなど、幼児の言動からは主体的で創造的な音楽表現が生起していた。

これらのことから、伴奏楽器として木琴や鉄琴を導入することにより、幼児の音への興味を引き出され、幼児が音を注意深く聴いたり、幼児主体の音楽表現が頻繁に生起したりするようになる可能性があること示唆された。この結果は、幼児の聴取能力や音楽表現を引き出すような保育室の環境設定を考慮するための重要な知見になると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

三橋 さゆり、幼児の一斉歌唱における教育的効果に関する考察、学校音楽教育実践論集、査読無、1、2017、112-113

三橋 さゆり、児童の歌唱活動における継続と省察の関連 歌唱活動に対する児童の気持ちや価値観の変化に関する分析を通して、音楽表現学、査読有、14、2016、1-17

[学会発表](計3件)

三橋 さゆり、幼児の歌唱活動における環境設定、日本保育学会第70回大会、2017年5月21日、川崎学園(川崎医療福祉大学・川崎医科大学・川崎医療短期大学)(岡山県倉敷市)

三橋 さゆり、幼児の一斉歌唱における教育的効果に関する考察、日本学校音楽教育実践学会第21回全国大会、2016年8月21日、北海道教育大学岩見沢校(北海道岩見沢市)

三橋 さゆり、児童の歌唱活動における意

欲の変化に関するプロセスの検討、日本教科教育学会第41回全国大会、2015年10月25日、広島大学東広島キャンパス(広島県東広島市)

[図書](計1件)

吉富功修・三村真弓編著、三橋 さゆり 他21名、ふくろう出版、改訂3班 幼児の音楽教育法 美しい歌声を目指して、2015、196(112-113)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

三橋 さゆり(MITSUHASHI, Sayuri)
埼玉大学・教育学部・講師
研究者番号：70758440

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()